エッセイ

上海のオールドジャズバンド

E-01

発行日

2005.12.22

上海の郊外で 2 ヶ所の工場を訪問したわれわれ 3 人は、夕刻の交通渋滞に思いのほか時間を取られ、7 時過ぎにやっとホテルに帰りついた。朝が早かったし、工場の建設現場を何度も昇り降りしていたから、疲れていたし空腹だった。そこですぐに服を着替えて、ホテルの中で夕食を取ることにした。ところがロビーに集まってみると、あいにく 2 ヶ所がパーティーの貸し切りで、残るのは和食の店しかない。だが上海にいるのに和食ではつまらない。やむなくタクシーで人民公園まで行き、そこから南京東路を歩いて適当なレストランを探すことにした。

ラッシュ時でホテルの前にはタクシーがいないから、通りに出て「流し」を拾おうとしたのだが、なかなか捕まらない。空車を目で追いながら交差点まで歩くと、方向違いの空車がきたので強引に乗り込んだ。「流し」のタクシーには悪質なのがいると聞いているが、こういうときには 3 人いると強気になれる。言葉は通じないから地図で場所を示すと、車は高層ビルの間を走り抜けて目的の広場についた。上海の高層ビルは、どれも色や形が個性的で面白い。とくに頂部の形で設計者が個性を発揮しようとするらしく、三角屋根やラクビーボールを乗せたような形、手を合わせたような奇抜なデザインもある。側面も縦方向を波のような曲面にしたり、斜めに切ったような形もある。夜はライトアップしており、まるで高層ビルのファッションショーのようだ。

南京東路は上海でもっとも賑やかな繁華街、というより中国で一番華やかな通りではないだろうか。人民公園から揚子江に面した外灘（バンドー）に続く約 1 キロメートルは、両側に商店とレストランがびっしりと並び、深夜まで昼間のように明るい。おそらく渋谷のセンター街や、池袋のサンシャイン通りより明るいだろう。看板が多くて明るいだけでなく、ほとんど全部の建物にイルミネーションが施されているからである。上海は電力不足で停電もあると聞いているが、それでも行政当局が上海の PR のために、夜の 11 時まで建物の夜間照明を推奨しているのである。道幅は東京の銀座通りぐらいで、夜は歩行者天国になっているから、人々はゆっくりと散策とショッピングを楽しんでいる。ときどき観光客を案内する電気自動車が歩道をゆっくりと走っている。物売りと客引きが多く、日本人と見るとしつこく寄ってくる。顔や体つきは中国人と変わらないのに、どうして日本人とわかるのだろう。トラブルが起こりやすいのか、制服警官があちこちにたむろしている。日本にも多いスターバックスコーヒーや、ケンタッキーフライドチキン、それに牛丼の吉野家や回転寿司もある。

物売りをかわし、客引きを振り切りながら先に進むと、やがて正面に対岸のテレビ塔が見えるようになった。これ以上行くとレストランがなくなりそうなので、右手の小ぎれいな店に入った。運がよいことに、細長いレストランの正面にステージがあり、中学生ぐらいの少年と少女がアクロバット体操を見せている。雑技団というのであろう。高級な技はなかったが、一所懸命に演じる姿が印象的だった。外国人が多いのか、料理のメニューに写真もついていたから注文は容易だった。写真がないときはメニューのキーワードと値段を基準に注文するが、ときどき失敗する。大連では柳川と書いてあったので、「どじょう」ではないかと期待して注文したら、「ししゃも」だったことがある。日本では「ししゃも」を「柳葉魚」と書くから、どこかで間違って伝わったのかもしれない。メニューではなく数を間違えることもある。一人ずつの「そば」を単品料理と勘違いして 3 人で 1 個しか頼まなかったこともある。

食事が済んでやっと落ち着いたわれわれは、道路を挟んだ反対側のホテルのバーに入った。上海に何度もきている仲間の 1 人が、ここのバーのジャズバンドが楽しいと言うのである。バーに近づくと入口から軽快な音楽が聞こえ、さっそく中に案内された。驚いたのはバーの造りで、梁が日本の古い庄屋の家のように黒くて太い。その梁に少なくとも数十年前の扇風機が取り付けられており、ゆらゆらと揺れながら金色の羽が空気をかき回している。カウンターや家具類も古いが良質の木製で、レトロっぽい雰囲気をかもしだしている。壁には上海がフランスの租界地だった頃の絵が十数点かかっており、揚子江に浮かぶジャンク船や、川岸のレンガの倉庫が往時の様子を伝えている。

案内された席はバンドのすぐ前で、まわりの席は一杯だったから、きっと空いたばかりに違いない。すぐにウエーターが来て、席料が 1 人 80 元だと言う。日本円にすると 1400 円ぐらいだから、いま食べ終わった夕食よりも高い。メニューはビールが約 800 円で、コーヒーが約 500 円である。かなり高いと思ったが、とりあえずコーヒーを注文してバンドを聞き始めた。構成は左からピアノ、ベース、真ん中がドラムで、その右がテナーサックスとアルトサックスである。まず気がついたのは、演奏者が皆かなりの年配者だということである。たぶん 70 才ぐらいだと思うが、きちんと背広を着て黙々と演奏している。まったく愛想がなく曲の紹介もないが、選曲は 70 年代から 80 年代に流行ったなつかしいメロディーで、私の好きなベニーグッドマンが流れて嬉しくなった。

客は中国人が多いが、アングロサクソンの欧米人もいて、後ろからドイツ語の会話が耳に入った。日本人も多いのか、「知床旅情」が演奏されていた。客の年令は 50 代を中心に、40 代から 70 代ぐらいに広がっている。正面には大きな看板がかかっていて、「和平飯店老年爵士楽団」とあり、その下に「Old Jazz Band Peace Hotel と書かれている。演奏者がシニアなのは「Old Jazz Band」だからで、

この「オールド」を売り物にしているのである。奏者は互いに全く声をかけずに次々と曲を変えていくのだが、よく見ていたらピアノ奏者が選曲していることがわかった。最初の伴奏やメロディーがピアノから流れると、他のパートが即応して演奏を始めるからである。楽譜はあるが、ほとんど暗記しているのであろう。でなければ数秒で即応できるものではない。それに眼鏡をかけていないから、老眼で楽譜を読めるのか疑わしい。それでも楽譜をめくっていたから、コンタクトをかけているのかもしれない。

われわれはこのオールドジャズバンドの演奏を聞きながら、1 日の疲れを忘れ、いつになくゆったりと満ち足りた気持ちになっていた。たぶん、バーの雰囲気が上品で落ち着いていたことや、曲のテンポが緩やかなメロディーだったせいもあるだろう。だが、私にはバンド奏者の雰囲気が客の気持ちをなごませ、楽にさせているようにも思えた。愛想はないけれど落ち着いていて安心感があり、押し付けがましくないのが心地よいのである。それに奏者は客に聞かせるために演奏していると言うよりも、自分たちの好きな曲を好きなように演奏して、自らも楽しんでいるように見える。客は金のためにのみ提供されるサービスより、自らも楽しみながら提供されるサービスの方が心地よいのではないだろうか。

バーの由緒が気になったのでパンフレットや案内を見たら、ここは上海でも有名なホテルということがわかった。建物は 2 棟で構成されており、1 棟は 1906 年、もう一棟は 1929 年と、第二次大戦の前に建てられている。建設当時の部屋も残されており、中国様式、アメリカ様式、フランス様式、イギリス様式、イタリア様式、インド様式、日本様式、スペイン様式などがある。建てられた当時はフランスの租界地だったから、このバーは華やかな国際社交場だったのに違いない。パンフレットによると、オールドジャズバンドは 1980 年に創設され、奏者の平均年令は 70 才とある。世界中の客がこのバーを訪れるようで、1996 年にはアメリカの「News Week」に、世界で最高のバーと紹介されている。

私は平均年令 70 才の奏者を中心とする「Old Jazz Band」を創設し、ホテルのバーの「目玉」にした発想に思いを馳せている。どうしてこんな思い切った試みができたのだろう。失敗するとは思わなかったのだろうか。決して派手ではない。華やかでもない。演奏がとくに上手なわけでもない。もちろん若くもない。愛想もなければサービスもよいとは思わない。それでいて、このバーが世界中の客を楽しませ、世界で最高のバーと称されている事実には脱帽するほかない。人々が真に求めている「心地よさ」や「安らぎ」は一体何なのだろう。少なくとも、表面的な見かけや派手さでないことだけは確かである。日本にもこうした「シニアによるシニアのためのエンターテイメント」が増えれば、ケチと言われるシニアももっとお金を使うのではないだろうか。

（おわり）　松村　眞

和平飯店老年爵士楽団（写真Ａ）

和平飯店老年爵士楽団（写真Ｂ）

写真は友好親善大使・矢島常光 Yajima Tsunemitsu さんの旅行記：
上海駅とバンドーの夜景、和平ホテルの老年ジャズバンドより転載。
（http://4travel.jp/traveler/jingdezhen/album/10013274）